

第1回 邑南町小中学校の在り方検討委員会会議録（要旨）

1. 日時 令和7年6月26日（木）13：30～15：30
2. 場所 邑南町健康センター元気館 会議室
3. 出席委員 松本委員、山下委員、山中委員、武田委員、土田委員
4. 事務局 大橋教育長、原課長、甲山補佐、森上主任

〔開会〕

1. 教育長あいさつ

本日はよろしくお願いします。町長が代わり財政再建の考えを示しました。その中で、学校の統廃合という言葉も出てきて、新聞等々に載りました。

町としては、いきなり学校の組み合わせをどうしていくかよりは、まずは教育の本筋を研究していこうという思いで、在り方検討委員会を発足しました。

町として教育をどのような方面から追求していくのか、今求められている「地域とともに」であったり、社会教育の関係であったり、共生社会、多様性など、また保護者の方に加わっていただき、多岐にわたるお考えを一つの価値として、この1年間かけて求めてまいりたいと思っています。

6回程度ですが、邑南町をしっかり支えていただけるような答申を求めたいと思っています。

1年間よろしくお願いします。

2. 各委員の自己紹介

3. 委員長選任（互選）

委員長：松本委員長

4. 副委員長選任（委員長が指名）

副委員長：山下副委員長

5. 委員長あいさつ

島根大学の松本です。島根大学理学部を卒業しています。

卒業後、10年間石見銀山を所有している民間企業に就職しました。その民間企業で国策である地球資源や環境の仕事をしていました。また国連とのつきあい、そこからSDGsの前任であるMDGsだとか、世界的なところの関わりを持たせてもらってきていました。

石見銀山では、世界遺産にすべく当時大田市の職員と頑張りました。世界遺産になってとても嬉しく思いました。

邑南町では久喜銀山遺跡が国指定の史跡に認められたわけですが、委員として加わり、こちらでも無事に教育的な資源となりました。

邑南町にある1つひとつの魅力、自然や社会的な文化的なことなど、子どもたちが1人ひとり誇りを持ってこの地域で学び育ち、そういう夢を先生方と協議して、1年後の答申につなげたいと思います。

皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

副委員長あいさつ

副委員長の山下です。15年にわたって邑南町の小中学校の授業研究に携わっていたので、ひょっとしたらこの中でも邑南町の小中学校のことをよく知っているのではないかと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

教育委員会から諮問

(大橋教育長から松本委員長に諮問)

6. 議題

(1) 邑南町の小中学校の在り方について

①検討委員会設置の経緯(教育長が説明)

- ・町長が20年ぶりに代わって方針が打ち出された。その中で学校統廃合という言葉も出てきて、新聞等々にも載った。
- ・小中学校の校舎が1校を除いて建て替えの時期を迎えていることから、小中学校の在り方を考えていこうということになった。
- ・いきなり単なる小中学校の数合わせではなく、本質の部分をしっかりと追及していきたいということで、教育委員会において、この役割を受け本検討委員会の設置となった。
- ・小中学校の在り方について、資料「小中学校の在り方検討イメージ図」にあるように、教育委員会と「地域づくり」を担当している課が併せ持ってそれぞれこの1年間研究をしていく。
- ・教育委員会では「小中学校の在り方検討委員会」、地域づくり担当課では「邑南ラボ共同研究」において、地域にとって学校とは何かという視点で地域に基軸を置いて、学校の存在・在り方を研究していくものである。それを1年後の総合教育会議でそれぞれの答申を持ち寄り、議論の上、小中学校の再編について町長が最終判断をするという道筋となっている。

②邑南町の小中学校の現状(教育長が説明)

- ・資料「邑南町小中学校分布図」を見ると、邑南町が「とても広い」という印

象である。

- ・ 邑南町の1つの強みは、小さくてもある小中学校11校。さらに県立学校が2校、保育所も9箇所あり、小さくてもあるという教育環境だ。そういったものを一体的に考えていく必要がある。
- ・ 資料「邑南町小中学校 児童・生徒数の推移」を見ると、20年間でこれだけ児童生徒数が減ってきたのがわかる。
- ・ その中で「学びの停滞があってはいけない」という所で、新たな視点と現状を踏まえて、最良の教育のあり方「邑南町らしい教育」のあり方、その「らしい」というところを委員の皆様で紐解いて、言葉にさせていただくと町としても嬉しいかぎり。
- ・ 小規模校の弱みの部分としては、教頭先生が担任を担わないといけない、事務職や養護教諭の配置がままならなくなっているなど、教職員の配置に対して厳しい状況となっている。

③意見交換

I. 小中学校の在り方検討のイメージ（松本委員長より説明）

検討プロセスの位置づけ：

資料：小中学校の在り方検討イメージ

- ・ 検討の進め方として、「小中学校の在り方検討委員会」と「邑南ラボ共同研究」が同時並行的に動いている。

「小中学校在り方検討委員会」…小中学校に焦点をあて子ども達の教育の在り方を考える。

「邑南ラボ共同研究」…「町」の立場から地域の学校を含めたことを考える。

- ・ 双方の報告を受けて、最終的には総合教育会議で基本方針を決定していく。
- ・ 答えありきではなく、本日第1回目で委員長として皆さんにお願いしたいのは、それぞれの委員の皆様から意見をいただき、第2回目までのところでどういう方向性があるのかを考え始めるきっかけ（スタートアップ）になったらと思う。

スケジュール：

資料：邑南町小中学校在り方検討委員会スケジュール（案）

- ・ 1年という期限がある中で6回を設定しているが、審議の経過も含めて6回で足りるのか足りないのかもがあるが、第4回目のところである程度の答えを模索していきたい。
- ・ 第5回目でまとめ、第6回目を経て教育長へ報告書を提出する。
- ・ 教育長や町長の考えが大きく影響してはいけないので、次回から教育長の同席は求めないこととする。

Ⅱ. 資料の紹介（松本委員長より説明）

資料：邑南町小中学校分布図

- ・小中学校が11校あり、邑南町は非常に広い。町村合併で3つの地域が一つになって邑南町を形成している。改めて邑南町の広さを感じている。

資料：邑南町小中学校 児童・生徒数の推移

- ・児童生徒数の推移を見ると、特に小学校が令和3年あたりから減ってきている。
- ・減少傾向は令和8年～12年までそのまま継続するであろう見込み。
- ・同じく中学校もその影響で減ってくる現状がある。

資料：邑南町小学校区 人口

- ・世帯数、人口のデータについては、審議の中で必要になる資料と考えている。

資料：山陰中央新報の新聞記事の切り抜き

- ・山本輝親さんが新聞記事となっている資料、日貫小の資料など
- ・この資料を見て、何が子どもたちにとって望まれるべき姿なのかなど、感想や意見を一人ひとりいただきたい。
- ・その後、感想や意見を基に議論を深めていきたい。

Ⅲ. 委員意見

松本委員長：

- ・お1人おひとり、それぞれの立場がある。学識経験者が私を含めて3名、保護者代表、多様性の視点、女性の視点も大変重要だと思う。

土田委員：

- ・資料の新聞記事を見て驚いている。自身の関係者の記事だった。松本先生にも関わってもらっていた記事でご縁を感じた。
- ・自身の娘が大学卒業後、邑南町に帰ってきているが、就職面接の時「なぜ邑南町で就職したいの？」という問いに、「祖父祖母と離れたくないから」と答えていた。私としては印象的で、同級生が外に出ている子も多い中、3人娘とも近くで過ごしてくれていて、邑南町が好きで、地元のあらがね太鼓に関わったりして、地元で就職したい、地域に関わりたい思いも持っているようだ。
- ・私自身地元が落ち着く、娘たちも選んでここにいるのは、何がそうさせているのか。
- ・仕事が忙しい中で、安定して子育てできたのは父母がいてくれたからだと思っている。その思いが娘たちにも伝わっている。その思いが大事だと思った。
- ・高齢化、少子化しているし自身も歳をとっていくが、おかげさまで幸せを感じている。
- ・母が「みんなが近くにいることが凄くありがたい」と話しており、母の祖母

も母がそばにいたことを喜んでいたという。このことを「なるほどねえ」と思っており、それぞれの世代が幸せを感じながら過ごせる町が大事なんだなと、帰りたくなる町なのかな思ったり、何があるからそうさせるのかを自分としては見つめることができれば良いと思う。

松本委員長：

- ・凄く良い話だと思って聞いていた。
- ・家族のつながりがこの町らしさの一つを感じた。親子がつながって仲良く暮らす。
- ・私も最近、小中学校で言えば、松江城を舞台に「親子で学ぶ」クイズ形式の学習会を企画している。やはり「学び」の中で親子が協力することが土田委員の話を聞いていて大事だと思った。帰ってきたくなる人とのつながりだと思った。

武田委員：

- ・まず資料を見て思ったのは、児童生徒数の減り方には衝撃を受けた。20年間でこれだけ減っているのは改めて驚いている。さらに20年経った時にはどうなるんだろうと、恐ろしいなと感じている。おそらく同じくらいのスピード感で減っていくのだろうと思う。
- ・私の肌感覚の感じとしては、保護者もこれは分かっている。保護者世代の30代から40代は、統廃合は致し方ないだろうという声が多い気がしている。
- ・一方で通学距離が長くなることへの不安の声をよく聞く。
- ・保護者として気になるのは、習い事、部活の距離感がよく話題に出てきている。
- ・部活で野球をやりたいが瑞穂中も石見中も人数が足りない。しかし、1つにするのも難しい。
- ・私の子は、小学生の時にサッカーをしていたが、サッカーは町内では矢上に1箇所しかなく、保護者の送迎が大変。しかし2チームに分けるほどは人数がいらない。また、中学校の部活にはサッカー部が無いため、続けるためには浜田市や江津市などの町外に行くしかない。やりたい事をさせてあげられないのが保護者としては、引っかかっている。
- ・私はAIとかオンラインが大好きなタイプだが、そういう人間からすると無理をして勉強させる必要がないのではないかとも思っている。
- ・矢上高校には普通科と産業技術科があり、進路を選択することができ、いいと思う。
- ・子どもたちが地元に戻ってくるかどうかについて、感覚的には帰りたい子どもは多いと思う。公民館事業のはばたき講座（高校生3年生と地域の方が対話をする事業）において、邑南町に帰れるなら帰りたいという子どもが多く

いた。自分たちの世代は後継のために帰らないといけないと考えている人も多く、自分たちの時代とは違っていた。彼らが大学に行った時に一旦離れるが、離れた時につながり続ける何かがあればいい。各集落にはお節介な大人がいっぱいいて、会うたびに「帰ってこい」と声掛けしており、目に見えない効果があることを実感している。みんなで支える雰囲気がある。それが学校の在り方に生かしたらいいと思う。

- ・文科系の部活の子どもの活躍の場が少ない状態。石見中には吹奏楽部、美術部があるが、瑞穂中には吹奏楽部のみ、羽須美中は体育会系しか選択肢がない。運動が苦手な子たちにも部活動の選択肢を増やしてあげたい。チャンスを作ってあげたい気がする。

松本委員長：

- ・中学校でサッカーは人気なのかなと思っていので、中学校にサッカー部がないとは思わなかった。
- ・大変貴重な保護者の肌感覚の意見だった。
- ・文部科学省の対話的な学びや対話だけでなく、スポーツするには人数が必要。これは苦しいと感じた。
- ・親世代が車で送迎に時間がかかる実態がある。
- ・とても参考になる意見だった。
- ・いったん皆さんの意見を聞いた後、過去10年間の新聞記事を準備しているので、子どもたちの活躍をみなさんに見ていただく時間を取りたい。どういことが町の魅力か、どういう所で子どもたちが活動しているのか、振り返りたいと思う。

山中委員：

- ・子どもたちの人数が減ってくることや、高齢化は全国的に同じこと。
- ・政府が地方創生、地域創生と言っているが、それに対して邑南町ではどういう施策を展開していくのか。人口が減少するのは仕方ない、変えようがないという状況なのか、人口を増やそうとする努力をしているのか。それを含めた統廃合の検討でないといけないと思う。
- ・島根県では平成17年からふるさと教育という事で故郷に誇り・愛着をもって、将来を担っていく人材を育てる取組みをしている。
- ・現存する小中学校がふるさとの宝や誇りをどのように位置づけて総合的な学習の時間をはじめとして、どう学習を展開しているのか。その成果がどう出てきているのか。学んだ子たちが以前よりも帰ってくる子が増えてきている状況にあるのか。
- ・仮に統合したとすると、統合したら広域になる。旧小学校の校区にあった誇りや宝を統合した大きな学校は取り扱う時間が減ってくるのは現実。それで

いいのか、併せて考えていかなければならない。

- ・たとえ小規模校であっても、地域の願い、期待に子どもが触れないと子どもたちに伝わらない。期待通りのことにはならない。そういった教育を統廃合問題と併せてどうなっていくのか心配をしている。
- ・私の校長時代に町内の小学校3校が1校に統合した経験がある。中学校はもとも1校だけで、一体型校舎を建築されたが、小中一貫教育をしていなかったの、教育長に提案し、一貫教育が実現したことがある。
- ・1校になってみると、生徒が行ったことがない地域があることに驚いた。一番行かない、世帯数が少ない集落に行って写生大会を行った。自身の願いとして、そうすればその地区に賑やかな中学生の声が響くことで、地域の人に喜んでもらえるのではないかという願いがあった。
- ・児童生徒数が少ない、いなくなった地区は、子ども達からも忘れ去られるというのが必然的な話になるのを危惧している。どう解決していくのか併せて考えていく。

松本委員長：

- ・大切なことが2点あった。1点目、一貫教育＝小中学校で通して考えていくことは邑南町でも必要。
- ・2点目は町を知ること。10年前、隠岐の4島合わせてジオパークが世界遺産になった時は、私も尽力した。教育委員会と環境省と組んで、「隠岐の人と自然の学習帳」に島ごとのジオパークの位置、小中学校の距離を載せて冊子を作り、学校に届けた。
- ・邑南町でも7つの小学校、3つの公民館にそれぞれ集めて同時多発的に星空を学習したことがある。高海自治会では化石が出る、日貫の近くには美味しいごぼうがある、といった地域を知ること、町を知ることが教育のコンテンツの一部としてたくさん位置づけていく必要があると感じた。

山下委員：

- ・15年間11校の小中学校で授業研究を行ってきた。子どもたちに分かる授業、学力のつく授業を行ってきたが、私達は「どんなに少ない学級でも授業そのものは日本最高の授業をしないとイケない」という信条でやってきた。人数が少なくなることについて危機感を持ったことがなかった。
- ・石見中学校が新しく建て替わる時に、委員として関わってきた。アンケート調査をしてみると、町民の方から色々な考え方・意見があった。「小中一貫校を作るべき」「どう少子化と向き合っていくべきか」「3町村が合併前と変わらず、そのままの姿で小中学校が存続している。何か考えないと子ども達にとっての最適な条件としての学校・学級になっていないのではないか」と鋭く指摘する地域の方もいた。

- ・そういった目を見た時に、単に学力形成だけでなく、様々な角度から、様々な視点を持って学校・学級、子ども、地域に対応していかないと邑南町そのものが持たなくなっていくという危機感を共有しながら学校づくりをしなければならないことが、しばらく前から来ていたのだろうと実感している。
- ・委員になったことで、11の小中学校と、もう一回学校の先生方も地域の保護者の視点、地域が持続、発展していけるような事に関わって学校がどう位置づけられたらいいのか、どう活動したらいいのかをPTAも一緒になって学校づくりそのものが地域づくりでもあるかのような学校のあり方を追求していく必要がある。
- ・世界一の授業を作ればいいと思ってやってきた自身として、授業そのものが地域の再生、活性化にも繋がっていく授業作りの在り方を考えていかないといけない。この観点から、地域が生き延びていけるような視点で1日6時間の授業を共に組み立てていくことを提言していきたい。

松本委員長：

- ・地域の持続可能性、委員会に与えられたのは子ども達の教育の在り方だが、その教育の在り方は町づくりと関与していると思う。
- ・本検討委員会は、教育の在り方を考えることが役割だが、町づくりの中で学校がどうあるべきかも教育の視点から併せて考えていかないといけない。
- ・PTAとの関与、授業作りの中に地域を生かした所がポイントだと思う。

4. 新聞記事を一同で確認

(山陰中央新報 過去10年間の邑南町小中学校の活動に関する記事の切り抜き)

- ・町の魅力が人だったりスポーツだったり、物だったりという記事、学校と学校が繋がっている記事がいくつかあった。そういうのが魅力の発見になる。
- ・石見養護で昨年、地域の事に取り組んだ。小学校で学んだことを参考にしてつながった学習ができるといいが、結局それぞれがそれぞれに学習している感がある。
- ・こうやって新聞で取り上げられて町民の人が知ったり、町外の人が知り、それが子ども達の自己肯定感や、その学びを深めようという気持ちになっている様な記事が見受けられる。いかに宣伝をするのが重要なのか。
- ・単発の成果の発信だけでなく、小中と一緒にあったり、養護学校と一緒に、高校と一緒にやるなど、繋がって発展していくと良いと思う。単発の学びの成果はわかるが、それが繋がっていく、繋がったという記事があまりない。
- ・道の駅と小学校が繋がる、あるいはそれは大変だから間で公民館が取り持ったなど、そういう流れがないと、広がりやもっと知ってもらうためのPRになら

ない気がする。1 個足りない、そんな感じがする。

- ・連携と継続的な何かが必要。
- ・体制づくり、何か仕組みがちょっと足りない。
- ・資料は小中学校に絞ったので、公民館が主催で小学生を対象にした行事など、次回は準備する。
- ・公民館の資料があると、またヒントになると思う。
- ・学校の総合的な学習の時間も、学校のカリキュラムが決まっているので良い事だとしても、何時間も授業する訳にはいかない。授業の先は、公民館に繋げて社会教育授業として子ども達は学べばいい。
- ・そういう風に発展した事例があると、とても素敵だと思う。
- ・学校と公民館が連携して、取組みが学校教育から社会教育に移っていき継続・発展していくのが最高のモデル。

5. 感想（これまでを）

松本委員長：

- ・松江市の知り合いから、私が教育学部に務めていることで話してもらった興味深い話がある。今は松江に住んでいる北海道出身の女性だが、小学生の時は同級生の女の子が1 人だけしかいなかったそうで、大規模な中学校に上がった時にちょっと怖かったと話してもらった。
- ・出雲市の平田では4 校の小学校が1 校に統合し、旅伏小学校としてこの4 月に開校した学校がある。先日見学すると、下校時は各方面へのスクールバスがあり、バス乗り場に集まり帰っていた。まだ開校して3 か月で、やっと落ち着いてきたところだそうだが、それぞれの地区ごとに地区の良さを分かり合うための学習があり、旧4 学区の良さをそれぞれ回って学習する総合的な学習を取り入れられていると聞いた。
- ・小さな学校で特色ある教育、この特色とは何かを諮問され、回答していくのに旅伏小学校が参考になる。旅伏小学校の課題などをお伝えして、第2 回以降の委員会での議論の1 つの参考にしたいと思う。
- ・これまで、意見交換や新聞記事見ていろいろな話をしていただいた。今日の段階では、「こうなったらいい」「ああなったらいいという」と提案ではなく、感想を述べていただき、会議を終わりたい。

土田委員：

- ・私は特別支援学校の勤務が主だった。邑南町の小中学校を中心に考える会だが、町内には県立矢上高校、県立石見養護学校、また保育所もたくさんある。その辺りの関連も合わせて考えていただけると嬉しい。
- ・養護学校は通っている児童・生徒の地域がさらに広がる。美郷町や広島県境の方から来ている生徒もいる。

- ・養護学校も特別支援学校も県の予算化もあり地域連携に取り組んでいるが、「地域」をどう捉えるか検討し、やはり今邑南町で学んでいることを大事にしたいと思った。せっかく学校が邑南町にあり、ここで子ども達が良い学びをする事で、それぞれの出身の所に帰っても良さに繋がるという想いで。
- ・石見養護学校の中での学びがその子どもの成長において、良さに繋がっていく事になると思うし、就労に向けての動きもあるので、そういう所も考えながら是非検討していただけたら嬉しい。

松本委員長：

- ・特別支援、SDGsでも誰1人取り残さないという言葉が非常に印象的で理念にもなっている。小規模校が多くなったこの地域では、「誰1人取り残さない」は結構胸に響いてくる。
- ・特別な支援が必要な児童・生徒もいればそうでない子もいて、これを全体でどう捉えていくのかという事の重要性和、地域をどう捉えるのか、考えていく必要がある。
- ・邑南町の中だけを考えているけれど、新聞記事で見たように近隣の市町村や地名が同じ町と関わるなど、そういう捉え方も視野として重要なと聞いていて思った。

武田委員：

- ・今日1日で色々勉強になった。統廃合の話になると未来が不安だったりとか、怖いなって思う議論になりがちだと思うが、前向きな（明るくは難しいかも知れないが）、何かしらのワクワク感みたいなものが提示できるような形になればなと願う。
- ・当事者として、保護者や地域の人達にいかに情報を出していくか、巻き込んでいくかがとても大事だと思っている。なるべく早い段階で周りの人達の思っている事が聞けるようなチャンスができれば良いと思う。

松本委員長：

- ・武田委員には特に親の目線などのいろいろな情報をまた集めてここで報告してほしいと思う。数字的に集めるという事ではなく、肌感覚でいいので、こういう話があったなど是非よろしく願いしたい。
- ・よくピンチはチャンスと言う。ワクワク感に変えたい。
- ・最近の小中学校が1つになった義務教育学校といって、国立では島根大学教育学部附属が初めて義務教育学校になっている。県内では松江市立八束学園が最初。義務教育学校の話も参考になると思う。

山中委員

- ・鳥取県の南部町でコミュニティ・スクールに町内の学校が取り組んでいる。2, 3年前には全国大会をしている。地域の人達が子ども達の教育に積極的に関わるような取組をされていて、ふるさと教育について学校・地域・保護者が一緒になって取り組んでいる。
- ・私のふるさと教育のイメージは、子どもたちにこの事だけは知っていてほしい（例えば、日貫出身の子にはこのゴボウのおいしさを味わってほしい、あの山の頂上の景色は見せておきたい）こと、地域の願いや宝を伝えたいことを地域側の視点、学校側の視点、保護者側からの視点を出し合って、それを「いつ」「だれが」「どこで」するのか取り組んでいくことだ。方法はコミュニティ・スクールでもいい。
- ・南部町ではふるさと教育を学んだ高校生が、せっかく地域の事を知ったので何か自分たちで出来る事はないかと取り組みを休みの日にしている。また、大学を卒業し就職して帰ってきた若者たちが、新しいタイプの青年団を結成し、高校でやっていたこと、中学校の時にふるさと教育で学んだことを基に、地域の人とさまざまな体験をとおして交流し、活躍している。素晴らしい取り組みだと思っている。
- ・そんな姿が邑南町でも見られるといい。地元に密着した各世代の活力を生かした取り組みができればいい。そんなイメージを持った。

松本委員長：

- ・地域と学校の連携、「新しいタイプの」というのがググッときた。コミュニティ・スクールという既存の組織があるが、名前にこだわらず、今文部科学省は社会に開かれた教育課程＝学校の中だけで子どもを育てるのではなく、地域と一体となって育てようとしている。今山中委員が言われたことそのもので、実態化でどれだけでできているのかということ、そんなにできていないような気がする。
- ・コミュニティ・スクールの大会でいろいろ魅力あるものがあったが、1つの参考にして邑南町らしいものができたらいいと思い、答申で示せたら良いと思っている。

山下委員：

- ・学習指導要領の改訂などで授業が変質してきたのではないかと。授業が非常におとなしくなっていると感じている。子どもが非常に礼儀正しい。おとなしい授業になっている。
- ・授業の中で、ガヤガヤ動いてもいいのではないかと。小学生は特にそんな感じになっている。呼びかけ合うなどの動きがなくなっている。
- ・しかし、中学生になると、生徒たちが助け合う、声を掛け合うことが以外と

見られる。小学校ではそれほどではなかったが、中学校ではそういう生徒が多くなってきている。人助けがうまくなっている。

- ・ 15年見ているが、ここ5年そんな生徒が多くなっている。親切。
- ・受けている数学が分からない子に対して、別の子が声掛けできており、それを適切に見守っている数学の先生の力もあると思っている。
- ・細かいところは分からないが、意外と邑南町の中学生の学力や人となりを支えているのではないか。こういう中学生を受け止める矢上高校の先生は幸せだと思う。
- ・教育や授業には「陶冶」(学力形成)と「訓育」(人格形成)という2つの機能があり、この2つを合わせ持つのが授業。授業は学力の方に集中しやすいが、授業の中でも小学生なり、中学生なりの人格形成がある。人間としての在り方が形成される。むしろ授業だからこそ、わからない子に教えたりと形成される。
- ・「みんなで分かっている」という動きが邑南町の特徴。そういう点では保護者も地域の人でも安心して通わせる中学校ではないかと思う。
- ・もっと地域の人でも中学生を支え、褒めていただきたい。中学生になって褒められることがないため。
- ・学び合って、お互いに高め合って、手を繋ぎ合って深め合っていくところに授業の課題がある。
- ・邑南町の小中学校の子どもたちの人となりを育てることが、学力も人格も繋がり、高め合っていけるということを追求していけば良いと思う。

松本委員長：

- ・主体的で、対話的で深い学びを求められている。
- ・邑南の学校には学び合いのチーム力があると思っている。地域との繋がりを意識すると地域肯定感も上がる。授業を通して人間形成していくことは大切だと思っている。
- ・5人の委員がそれぞれの思いでこの場にいるのか分かち合うことができたと思う。色々な現状課題を共有できたと思っている。
- ・子どもにとって一体何が大事なのか、学校という組織、地域との関わりがどうなのかを深めていくことを次回からの審議につなげていきたい。

7. 次回開催日の確認

委員それぞれ都合のつく日程を伝え事務局で調整

〔閉会〕